

目次

はじめに	-----	2
第一章 調査		
第一節 調査の目的	-----	3
第二節 調査の方法	-----	3
アンケート	-----	4
第二章 分析		
第一節 因子分析の結果	-----	6
第二節 全調査者についての分析	-----	12
第三節 男性についての分析	-----	25
第四節 女性についての分析	-----	33
第三章 考察	-----	43
第四章 まとめ	-----	45
参考文献	-----	46
おわりに	-----	47

音楽的経験が音楽行動に与える影響について

95512E 松阪育美

はじめに

現代は、音楽が身近にあふれている。テレビを見ても、街を歩いているだけでも必ずと言っていいほど音楽が聞こえてくる。個人でも、ステレオでCDを聞いたり、コンサートにいったりと音楽を聞いている。音楽は、自然に生活のなかにとけ込んでいる。

大学に入学して芸術系(音楽)の授業を受けるなか音楽能力の差を感じる事が多くあった。器楽や歌唱の能力の差ももちろん感じましたが音楽に対する意欲の大きさの差は前者の差よりも大きく感じた。生活の中に音楽を取り入れて楽しんでいる人が、授業では難しいと言って楽しそうでない。逆に、楽譜が読めなくても耳コピーで音を探して曲を弾いている人がいる。楽譜が読めないという能力的不足をものともしない意欲に溢れている。「音楽」というものへの反応が人によって全く違うように思われる。「音楽」というと「クラシック」を思い浮かべ、身構える人が多いのではないだろうか。これらの音楽への感情や意欲の差はどこからくるのだろうか。

価値観が多様化するなかで音楽の楽しみ方も多様化している。様々な音楽との関わり方が存在する。この「音楽との関わり方」を以後「音楽行動」と表す。

本論文では、現在の音楽行動がどこから来るのか、過去の経験を中心に原因を探りたい。

第一章 調査

第一節 調査の目的

学校、地域、家庭での経験の差が現在の音楽行動にどのように影響しているかを探る。

第二節 調査の方法

1、調査対象

関西学院大学	学生	30名
鳥取大学	学生	33名
兵庫教育大学	学生	129名

2、質問紙の回収状況

回収枚数 192 枚 有効回答数 184 枚(有効回答率 95.8%)

3、調査期間

1998年11月9日～11月27日

4、調査の方法

学校・地域・家庭での経験と現在どのように音楽と接しているかを問う項目を30個設定した。調査は質問紙形式で行った。回答方法は20項目に2段階評定法、8項目に選択方式、2項目に書き込みを用いた。

5、分析方法

- 1、過去の音楽的経験を問う質問項目に因子分析(ヴァリマックス法に依る直交回転)を行った。各因子を命名、解釈した。
- 2、被調査者を各因子を持つ人と持たない人に分け、現在の音楽行動を問う各質問項目ごとの平均点を算出し、t検定を行った。
- 3、現在の音楽行動を問う各質問項目ごとに因子となった過去の音楽的経験を問う各質問項目ごとの平均点を算出しt検定を行った。

以下にアンケートを掲載する。

音楽についてのアンケート

性別(男・女) 年齢()歳

- 1、どんな音楽が好きですか。複数可
(ロック、ポップス、演歌、クラシック、邦楽、民族音楽、その他{ })
- 2、現在、どのような音楽活動をしていますか。当てはまるもの全てに を
(吹奏楽、管弦楽、合唱、バンド、邦楽、作曲、その他{ })
- 3、現在、演奏できる楽器がある。ある場合は書き込んで下さい。
()()()()
- 4、音楽(ピアノ等)のおけいこに通っていた。
(1.ない、2.1~2年、3.3~5年、4.6~9年、5.10年以上)
- 5、学校(小、中、高)で音楽のクラブに入っていた。 [はい、いいえ]
5で「はい」に をつけた人だけ答えてください。
 - ・それは、いつですか。当てはまるもの全てに を(小、中、高)
 - ・なぜクラブに入っていたのですか。当てはまるものに を
(1.授業と違うことができたから、2.音楽が好きだから、3.友達と一緒にだから
4.顧問の先生が好きだから、5.その他{ })
- 6、地域の吹奏楽、管弦楽、合唱団に入って活動していた。 [はい、いいえ]
6で「はい」に をつけた人だけ答えてください。
 - ・それは、いつですか。当てはまるもの全てに (小、中、高)
 - ・なぜその活動をしていたのですか。当てはまるものに を
(1.音楽が好きだから、2.友達と一緒にだから、3.親・兄弟と一緒にだから、
4.多くの人に会えたから、5.その他{ })
- 7、地域の音楽の催し物に興味・関心があった。 [はい、いいえ]
- 8、学校(小、中、高)の音楽の授業は好きだった。 [はい、いいえ]
8で「はい」に をつけた人だけ答えてください。
 - ・それは、いつですか。当てはまるもの全てに (小、中、高)
 - ・好きだった授業内容は何ですか。複数可
(歌唱、合唱、器楽、鑑賞、作曲、音符)
- 9、音楽の授業は、現在の音楽の好き・嫌いに影響していますか。 [はい、いいえ]
- 10、小学校で音楽専科の先生に習った。 [はい、いいえ]
- 11、学校で行われた音楽鑑賞会は楽しかった。 [はい、いいえ]
- 12、音楽会・演奏会等の大勢の人の前での経験は楽しかった。 [はい、いいえ]
- 13、大学生になるまでに、生の演奏を聴きに言ったことがある。 [はい、いいえ]
(ロック、ポップス、演歌、クラシック、邦楽、民族音楽、その他{ })
- 14、誰かから影響を受けて音楽を好きになったと言える。 [はい、いいえ]
14で「はい」に をつけた人だけ答えてください。
 - ・それは誰ですか。(学校の教師、親、兄弟、友人、その他{ })
- 15、映画・テレビで聞いた曲を改めて聞きたいと思ったことがある。 [はい、いいえ]
- 16、現在、気に入っている曲はどうやって知ったのですか。

(1 映画、 2 テレビ、 3 ラジオ、 4 ファンだから、 5 なんとなく)

17、お気に入りのアーティストはいますか。 [はい、いいえ]

17で「はい」に つけた人だけ教えてください。

・それは誰ですか。()

・そのアーティストが好きな理由は何ですか。

(1. 歌詞が好き、 2. 曲が好き、 3. ルックスが好き、 4. 現在売れているから、
5. その他 { })

・好きなアーティストの曲しか聴かない。 [はい、いいえ]

18、音楽をどのような方法で聴きますか。複数可

(CD、MD・テープ、テレビ・ラジオ、コンサート、その他 { })

19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。 [はい、いいえ]

20、何かをしている時に音楽を聞きますか。

(1. 聞かない、 2. 勉強中、 3. 運転中、 4. 乗車・歩行中、 5. その他 { })

21、カラオケに行って歌うのが好きである。 [はい、いいえ]

22、音楽に合わせて体を動かすのが好きだ。 [はい、いいえ]

23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。 [はい、いいえ]

24、知っている曲をラララや歌詞で歌うことができる。 [はい、いいえ]

25、音名と階名の違いが分かる。 [はい、いいえ]

26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。 [はい、いいえ]

27、楽譜を見て演奏することができる。 [はい、いいえ]

28、演奏できるようになりたい楽器がある。あれば書き込んで下さい。

() () () ()

29、これからできるようになりたい音楽活動は何ですか。複数可

(指揮、作曲、弾き語り、即興演奏、初見演奏、その他 { })

30、音楽を生かした職業につきたい。 [はい、いいえ]

ご協力ありがとうございました。

第二章 分析

第一節 因子分析の結果

過去の音楽的経験を問う質問項目に因子分析(ヴァリマックス法に依る直交回転)を行った。各因子を解釈、命名した。

(1) 全調査者の因子

内 容	1	2	3	4	5
Q8、学校の音楽の授業は好きだった。	0.655	0.263	0.194	-0.133	0.174
Q11、学校で行われた音楽鑑賞会は楽しかった。	0.654	0.126	-0.094	0.041	-0.064
Q12、音楽会・演奏会の人前での経験は楽しかった。	0.484	0.167	0.146	0.332	0.104
Q4、音楽(ピアノ等)のおけいこに通っていた。	-0.181	-0.578	-0.048	-0.138	0.063
Q5、学校で音楽のクラブに入っていた。	0.127	0.616	0.076	0.079	0.061
Q7、地域の音楽の催し物に興味・関心があった。	0.43	0.048	0.486	0.121	-0.006
Q13大学生になるまでに生の演奏を聴きに行った。	-0.02	0.068	0.398	0.115	-0.136
Q6、地域の吹奏・管弦楽、合唱団に入っていた。	0.018	0.124	0.137	0.39	0.101
Q10、小学校で音楽専科の先生に習った。	0.016	0.001	-0.053	0.047	0.23

(1) 第一因子

第一因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 8、学校(小、中、高)の音楽の授業は好きだった。」(0.655)

「Q 11、学校で行われた音楽鑑賞会は楽しかった。」(0.654)

「Q 12、音楽会・演奏会等の大勢の人の前での経験は楽しかった。」(0.484)

など、3項目である。

第一因子の項目の内容は、いずれも好き・楽しいと言う個人の好みに関する項目である。そこで、第一因子を「嗜好の因子」と命名する。

(2) 第二因子

第二因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 4、音楽(ピアノ等)のおけいこに通っていた。」(-0.578)

「Q 5、学校(小、中、高)で音楽のクラブに入っていた。」(0.616)

の2項目である。

第二因子の項目の内容は、おけいこの経験の有無と音楽クラブの経験の有無に関する項目である。したがって、第二因子を「音楽経験の因子」と命名する。

(3)第三因子

第三因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 7、地域の音楽の催し物に興味・関心があった。」(0.486)

「Q 13、大学生になるまでに生の演奏を聴きに行ったことがある。」(0.398)
の2項目である。

第三因子の項目の内容は、学校以外の場で自ら進んで音楽に関わろうとした経験を問う項目である。したがって、第三因子を「自発性の因子」と命名する。

(4)第四因子

第四因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 6、地域の吹奏楽・管弦楽・合唱団に入って活動していた。」(0.39)

の1項目である。

第四因子の項目の内容は、音楽経験の有無を問う項目である。しかし、音楽経験の因子である第二因子は0.124であり、第四因子の負荷量が高い。そこで地域の音楽活動団体に所属していたかどうかを問う帰属性を問うているので「帰属の因子」と命名する。

(5)第五因子(教師の因子)

第五因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 10、小学校で音楽専科の先生に習った。」(0.23)

の1項目である。

第五因子の項目の内容は、教師についてである。したがって、「教師の因子」と命名する。

(2) 男性の因子

男子全体の因子分析					
内 容	1	2	3	4	5
Q11、学校で行われた音楽鑑賞会は楽しかった。	0.715	0.005	-0.03	-0.077	0.13
Q8、学校の音楽の授業は好きだった。	0.66	0.14	-0.106	0.28	-0.155
Q12、音楽会・演奏会の人前での経験は楽しかった。	0.547	0.028	0.133	0.307	0.361
Q5、学校で音楽のクラブに入っていた。	0.029	0.667	0.048	0.107	0.005
Q6、地域の吹奏・管弦楽、合唱団に入っていた。	0.1	0.432	-0.026	0.092	0.396
Q4、音楽(ピアノ等)のおけいこに通っていた。	-0.107	0.06	0.392	-0.218	-0.117
Q10、小学校で音楽専科の先生に習った。	0.03	0	0.428	0.03	0.06
Q7、地域の音楽の催し物に興味・関心があった。	0.351	0.324	0.215	0.694	-0.02
Q13大学生になるまでに生の演奏を聴きに行った。	0.002	0.041	-0.137	0.342	0.061

(1) 第一因子

第一因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q8、学校(小、中、高)の音楽の授業は好きだった。」(0.655)

「Q11、学校で行われた音楽鑑賞会は楽しかった。」(0.654)

「Q12、音楽会・演奏会等の大勢の人の前での経験は楽しかった。」(0.484)

など、3項目である。

第一因子の項目の内容は、いずれも好き・楽しいと言う個人の好みに関する項目である。

そこで、第一因子を「嗜好の因子」と命名する。

(2) 第二因子

第二因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q5、学校(小、中、高)で音楽のクラブに入っていた。」(0.667)

「Q6、地域の吹奏楽・管弦楽・合唱団に入って活動していた。」(0.432)

の2項目である。

第二因子の項目の内容は、学校と地域の音楽活動をしている団体への所属を問う項目である。そこで、「音楽活動の因子」と命名する。

(3)第三因子

第三因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 4、音楽(ピアノ等)のおけいこに通っていた。」(0.392)

「Q 10、小学校で音楽専科の先生に習った。」(0.428)

の2項目である。

第三因子の2項目の内容に共通するのは、どこで、どのように学習したかということである。そこで、「学習方法についての因子」と命名する。

(4)第四因子

第四因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 7、地域の音楽の催し物に興味・関心があった。」(0.694)

「Q 13、大学生になるまでに生の演奏を聴きに行ったことがある。」
(0.342)

の2項目である。

第四因子の項目の内容は、学校以外の場で自ら進んで音楽に関わろうとした経験を問う項目である。したがって、第四因子を「自発性の因子」と命名する。

(3) 女性の因子

女子全体の因子分析					
内 容	1	2	3	4	5
Q8、学校の音楽の授業は好きだった。	0.672	0.156	0.097	-0.174	-0.001
Q11、学校で行われた音楽鑑賞会は楽しかった。	0.517	-0.015	0.049	0.035	-0.043
Q4、音楽(ピアノ等)のおけいこに通っていた。	-0.014	-0.432	-0.157	0.131	-0.093
Q5、学校で音楽のクラブに入っていた。	0.108	0.689	-0.048	0.041	0.046
Q7、地域の音楽の催し物に興味・関心があった。	0.398	-0.028	0.647	0.112	0.107
Q13大学生になるまでに生の演奏を聴きに行った。	-0.037	0.174	0.282	0.098	0.159
Q10、小学校で音楽専科の先生に習った。	0.039	0.046	-0.096	-0.531	0.04
Q6、地域の吹奏・管弦楽、合唱団に入っていた。	-0.134	0.05	0.145	-0.104	0.431
Q12、音楽会・演奏会の人前での経験は楽しかった。	0.341	0.13	0.03	0.073	0.43

(1) 第一因子

第一因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 8、学校(小、中、高)の音楽の授業は好きだった。」(0.672)

「Q 11、学校で行われた音楽鑑賞会は楽しかった。」(0.517)

など、2項目である。

第一因子の項目の内容は、いずれも好き・楽しいと言う個人の好みに関する項目である。そこで、第一因子を「嗜好の因子」と命名する。

(2) 第二因子

第二因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 4、音楽(ピアノ等)のおけいこに通っていた。」(-0.432)

「Q 5、学校(小、中、高)で音楽のクラブに入っていた。」(0.689)

の2項目である。

第二因子の項目の内容は、おけいこの経験の有無と音楽クラブの経験の有無に関する項目である。したがって、第二因子を「音楽経験の因子」と命名する。

(3) 第三因子

第三因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 7、地域の音楽の催し物に興味・関心があった。」(0.647)

「Q 13、大学生になるまでに生の演奏を聴きに行ったことがある。」(0.282)

の2項目である。

第三因子の項目の内容は、学校以外の場で自ら進んで音楽に関わろうとした経験を問う項目である。したがって、第四因子を「自発性の因子」と命名する。

(4)第四因子

第四因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 10、小学校で音楽専科の先生に習った。」(-0.531)

の1項目である。

第四因子の項目の内容は、教師についてである。したがって、「教師の因子」と命名する。

(5)第五因子

第五因子で高い負荷量を示した質問項目は、

「Q 6、地域の吹奏楽・管弦楽・合唱団に入って活動していた。」(0.43)

「Q 12、音楽会・演奏会等の大勢の前での経験は楽しかった。」(0.43)

の2項目である。

第五因子の項目に共通する内容に発表が考えられる。「Q 6、地域の吹奏楽・管弦楽・合唱団に入って活動していた。」という内容から人前で演奏する機会が多くあったと考えられる。そこで、Q 1 2の質問内容と共通する「発表の因子」と命名する。

第二節 全調査者についての分析

(1)全調査者を各因子を持つ人と持たない人に分け、現在の音楽行動を問う各質問項目ごとの平均点を算出し t 検定を行った。

第一因子					
Q17				Q19	
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.9885	3.0870		平均	4.9529
分散	3.0580	4.1739		分散	0.1882
観測数	87	23		観測数	85
プールされた分散	3.2853			プールされた分散	0.6479
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	108			自由度	106
t	2.1214			t	3.4282
P(T<=t) 片側	0.0181			P(T<=t) 片側	0.0004
t 境界値 片側	1.6591			t 境界値 片側	1.6594
P(T<=t) 両側	0.0362			P(T<=t) 両側	0.0009
t 境界値 両側	1.9822			t 境界値 両側	1.9826
t 検定の結果、5 %水準で有意であった。			t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		
Q21				Q22	
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.0345	3.0870		平均	4.0345
分散	2.9639	4.1739		分散	2.9639
観測数	87	23		観測数	87
プールされた分散	3.2104			プールされた分散	3.1975
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	108			自由度	108
t	2.2555			t	3.0896
P(T<=t) 片側	0.0131			P(T<=t) 片側	0.0013
t 境界値 片側	1.6591			t 境界値 片側	1.6591
P(T<=t) 両側	0.0261			P(T<=t) 両側	0.0025
t 境界値 両側	1.9822			t 境界値 両側	1.9822
t 検定の結果、5 %水準で有意であった。			t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		
Q23				Q24	
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.7701	3.6087		平均	4.7241
分散	0.8768	3.7945		分散	1.0393
観測数	87	23		観測数	87
プールされた分散	1.4711			プールされた分散	1.5490
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	108			自由度	108
t	4.0841			t	3.2265
P(T<=t) 片側	4.259E-05			P(T<=t) 片側	0.0008
t 境界値 片側	1.6591			t 境界値 片側	1.6591
P(T<=t) 両側	8.518E-05			P(T<=t) 両側	0.0017
t 境界値 両側	1.9822			t 境界値 両側	1.9822
t 検定の結果、1 %水準で有意であった。			t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		
Q25				Q26	
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.5287	2.3913		平均	2.9310
分散	3.7637	3.7945		分散	4.0417
観測数	87	23		観測数	87
プールされた分散	3.7700			プールされた分散	3.8754
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	108			自由度	108
t	2.4985			t	1.9229
P(T<=t) 片側	0.0070			P(T<=t) 片側	0.0286
t 境界値 片側	1.6591			t 境界値 片側	1.6591
P(T<=t) 両側	0.0140			P(T<=t) 両側	0.0571
t 境界値 両側	1.9822			t 境界値 両側	1.9822
t 検定の結果、1 %水準で有意であった。			t 検定の結果、5 %水準で有意であった。		

Q27		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.6667	2.0435
分散	3.5969	3.2253
観測数	87	23
プールされた分散	3.5212	
仮説平均との差異	0	
自由度	108	
t	3.6894	
P(T<=t) 片側	0.0002	
t 境界値 片側	1.6591	
P(T<=t) 両側	0.0004	
t 境界値 両側	1.9822	
t 検定の結果、1%水準で有意であった。		

第二因子		
Q19		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	5	4.7468
分散	0	0.9607
観測数	44	79
プールされた分散	0.6193	
仮説平均との差異	0	
自由度	121	
t	1.7102	
P(T<=t) 片側	0.0449	
t 境界値 片側	1.6575	
P(T<=t) 両側	0.0898	
t 境界値 両側	1.9798	
t 検定の結果、10%水準で有意であった。		

Q22		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.2	3.4691
分散	2.6182	3.8272
観測数	45	81
プールされた分散	3.3982	
仮説平均との差異	0	
自由度	124	
t	2.1324	
P(T<=t) 片側	0.0175	
t 境界値 片側	1.6572	
P(T<=t) 両側	0.0349	
t 境界値 両側	1.9793	
t 検定の結果、5%水準で有意であった。		

Q26		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.2	1.6420
分散	2.6182	2.1827
観測数	45	81
プールされた分散	2.3372	
仮説平均との差異	0	
自由度	124	
t	8.9995	
P(T<=t) 片側	1.639E-15	
t 境界値 片側	1.6572	
P(T<=t) 両側	3.277E-15	
t 境界値 両側	1.9793	
t 検定の結果、1%水準で有意であった。		

Q30		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	1.8889	1.4250
分散	2.8283	1.4880
観測数	45	80
プールされた分散	1.9674345	
仮説平均との差異	0	
自由度	123	
t	1.7748	
P(T<=t) 片側	0.0392	
t 境界値 片側	1.6573	
P(T<=t) 両側	0.0784	
t 境界値 両側	1.9794	
t 検定の結果、10%水準で有意であった。		

Q30		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	1.9885	1
分散	2.9650	0
観測数	87	22
プールされた分散	2.3831	
仮説平均との差異	0	
自由度	107	
t	2.6833	
P(T<=t) 片側	0.0042	
t 境界値 片側	1.6592	
P(T<=t) 両側	0.0084	
t 境界値 両側	1.9824	
t 検定の結果、1%水準で有意であった。		

Q21		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.2889	3.4198
分散	2.3919	3.8716
観測数	45	81
プールされた分散	3.3466	
仮説平均との差異	0	
自由度	124	
t	2.5554	
P(T<=t) 片側	0.0059	
t 境界値 片側	1.6572	
P(T<=t) 両側	0.0118	
t 境界値 両側	1.9793	
t 検定の結果、1%水準で有意であった。		

Q25		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.9333	2.2840
分散	3.2	3.5309
観測数	45	81
プールされた分散	3.4135	
仮説平均との差異	0	
自由度	124	
t	4.8016	
P(T<=t) 片側	2.224E-06	
t 境界値 片側	1.6572	
P(T<=t) 両側	4.447E-06	
t 境界値 両側	1.9793	
t 検定の結果、1%水準で有意であった。		

Q27		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.8222	1.8889
分散	0.6949	2.8
観測数	45	81
プールされた分散	2.0530	
仮説平均との差異	0	
自由度	124	
t	11.0110	
P(T<=t) 片側	2.189E-20	
t 境界値 片側	1.6572	
P(T<=t) 両側	4.377E-20	
t 境界値 両側	1.9793	
t 検定の結果、1%水準で有意であった。		

第三因子		
Q14		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.1176	2.1852
分散	4.0457	3.4644
観測数	68	27
プールされた分散	3.8831	
仮説平均との差異	0	
自由度	93	
t	2.0802	
P(T<=t) 片側	0.0201	
t 境界値 片側	1.6614	
P(T<=t) 両側	0.0403	
t 境界値 両側	1.9858	

t 検定の結果、5 %水準で有意であった。

Q21		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.1765	3.2222
分散	2.6550	4.1026
観測数	68	27
プールされた分散	3.0597	
仮説平均との差異	0	
自由度	93	
t	2.3983	
P(T<=t) 片側	0.0092	
t 境界値 片側	1.6614	
P(T<=t) 両側	0.0185	
t 境界値 両側	1.9858	

t 検定の結果、1 %水準で有意であった。

Q25		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.6471	2.4815
分散	3.6348	3.8746
観測数	68	27
プールされた分散	3.7018	
仮説平均との差異	0	
自由度	93	
t	2.6632	
P(T<=t) 片側	0.0046	
t 境界値 片側	1.6614	
P(T<=t) 両側	0.0091	
t 境界値 両側	1.9858	

t 検定の結果、1 %水準で有意であった。

Q27		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.7647	2.1852
分散	3.4662	3.4644
観測数	68	27
プールされた分散	3.4657	
仮説平均との差異	0	
自由度	93	
t	3.7300	
P(T<=t) 片側	0.0002	
t 境界値 片側	1.6614	
P(T<=t) 両側	0.0003	
t 境界値 両側	1.9858	

t 検定の結果、1 %水準で有意であった。

第四因子		
Q23		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.8235	4.4353
分散	3.5294	1.9514
観測数	17	170
プールされた分散	2.0879	
仮説平均との差異	0	
自由度	185	
t	-1.6644	
P(T<=t) 片側	0.0489	
t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0977	
t 境界値 両側	1.9729	

t 検定の結果、10 %水準で有意であった。

Q19		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	5	4.68
分散	0	1.2267
観測数	66	25
プールされた分散	0.3308	
仮説平均との差異	0	
自由度	89	
t	2.3692	
P(T<=t) 片側	0.0100	
t 境界値 片側	1.6622	
P(T<=t) 両側	0.0200	
t 境界値 両側	1.9870	

t 検定の結果、1 %水準で有意であった。

Q22		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.1176	3.0741
分散	2.7919	4.1481
観測数	68	27
プールされた分散	3.1711	
仮説平均との差異	0	
自由度	93	
t	2.5763	
P(T<=t) 片側	0.0058	
t 境界値 片側	1.6614	
P(T<=t) 両側	0.0116	
t 境界値 両側	1.9858	

t 検定の結果、1 %水準で有意であった。

Q26		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.3529	1.4444
分散	3.9333	1.6410
観測数	68	27
プールされた分散	3.2924	
仮説平均との差異	0	
自由度	93	
t	4.6239	
P(T<=t) 片側	6.064E-06	
t 境界値 片側	1.6614	
P(T<=t) 両側	1.213E-05	
t 境界値 両側	1.9858	

t 検定の結果、1 %水準で有意であった。

Q30		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	2.3235	1
分散	3.5356	0
観測数	68	27
プールされた分散	2.5471	
仮説平均との差異	0	
自由度	93	
t	3.6457	
P(T<=t) 片側	0.0002	
t 境界値 片側	1.6614	
P(T<=t) 両側	0.0004	
t 境界値 両側	1.9858	

t 検定の結果、1 %水準で有意であった。

第五因子		
Q17		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.1579	3.3704
分散	2.6794	3.9357
観測数	133	54
プールされた分散	3.0393	
仮説平均との差異	0	
自由度	185	
t	2.7995	
P(T<=t) 片側	0.0028	
t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0057	
t 境界値 両側	1.9729	

t 検定の結果、1 %水準で有意であった。

第一因子(嗜好因子)

第一因子は、

- 「17、お気に入りのアーティストはいますか。」
- 「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」
- 「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」
- 「22、音楽に合わせて体を動かすのが好きだ。」
- 「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」
- 「24、知っている曲をラララや歌詞で歌うことができる。」
- 「25、音名と階名の違いが分かる。」
- 「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」
- 「27、楽譜を見て演奏することができる。」
- 「30、音楽を生かした職業につきたい。」

以上の質問において有意差を持つ。

第一因子（嗜好因子）を持つ人は、音楽を積極的に楽しんでいる。

音楽能力は、第一因子を持たない人より優れている。また、職業に行きたいと思っている人も多い。

第二因子（音楽経験因子）

第二因子は、

- 「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」
- 「22、音楽に合わせて体を動かすのが好きだ。」
- 「25、音名と階名の違いが分かる。」
- 「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」
- 「27、楽譜を見て演奏することができる。」

以上の質問において有意差を持つ。

第二因子を（音楽経験）を持つ人は、音楽を積極的に楽しんでいる。

「音名と階名の違い」という少しややこしい理論が解っている人が多い。

「ある音を聞くとその音の高さが分かる。」という絶対音感を持っている人が多い。「27、楽譜を見て演奏することができる。」読譜力を持つ人が多い。従って、幼少期に音楽教育を受けた人、また、身につけるのに時間がかかる能力が身に付いている。

第三因子（自発性の因子）

第三因子は、

- 「14、誰かから影響を受けて音楽を好きになったと言える。」
- 「17、お気に入りのアーティストはいますか。」
- 「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」
- 「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」
- 「22、音楽に合わせて体を動かすのが好きだ。」
- 「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」
- 「24、知っている曲をラララや歌詞で歌うことができる。」
- 「25、音名と階名の違いが分かる。」
- 「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」
- 「27、楽譜を見て演奏することができる。」
- 「30、音楽を生かした職業につきたい。」

以上の質問において有意差を持つ。

第三因子を持つ人は、積極的に音楽を楽しんでいる人が多い。

音楽能力的にも優れている人が多い。

特徴的なのが影響を受けた人が多いことである。

第四因子（帰属の因子）

第四因子では、どの質問項目にも有意差を持つものはなかった。

有意差を生む因子でない。従って、現在に影響をあまり与えていない。

第五因子（教師の因子）

第五因子は、

- 「17、お気に入りのアーティストはいますか。」

以上の質問において有意差を持つ。

(2) 現在の音楽行動を問う各質問項目ごとに因子となった過去の音楽的経験を問う各質問項目ごとの平均点を算出しt検定を行った。このt検定を行って有意差を見ることによって、音楽行動をしている人が持っている因子や経験がわかる。

Q2から			Q13		
Q5			Q13		
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.1714	2.1842	平均	4.7714	4.1842
分散	4.0874	3.3566	分散	0.8874	2.6148
観測数	35	152	観測数	35	152
プールされた分散	3.4909		プールされた分散	2.2974	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	2.8183		t	2.0664	
P(T<=t) 片側	0.0027		P(T<=t) 片側	0.0201	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0054		P(T<=t) 両側	0.0402	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1%水準で有意であった。			t 検定の結果 5%水準で有意であった。		
Q14から			Q8		
Q7			Q8		
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	2.9277	2.3077	平均	4.133	3.615
分散	4.0435	3.5549	分散	2.751	3.656
観測数	83	104	観測数	83	104
プールされた分散	3.771		プールされた分散	3.2549	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	2.169		t	1.948	
P(T<=t) 片側	0.016		P(T<=t) 片側	0.026	
t 境界値 片側	1.653		t 境界値 片側	1.653	
P(T<=t) 両側	0.031		P(T<=t) 両側	0.053	
t 境界値 両側	1.973		t 境界値 両側	1.973	
t 検定の結果 5%水準で有意であった。			t 検定の結果 5%水準で有意であった。		
Q17から			Q11		
Q10			Q11		
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.0657	3.2400	平均	3.7356	1.8889
分散	2.8854	4.0229	分散	3.4788	3.1111
観測数	137	50	観測数	174	9
プールされた分散	3.1866		プールされた分散	3.4626	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	181	
t	2.7995		t	2.9032	
P(T<=t) 片側	0.0028		P(T<=t) 片側	0.0021	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6533	
P(T<=t) 両側	0.0057		P(T<=t) 両側	0.0042	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9732	
t 検定の結果 1%水準で有意であった。			t 検定の結果 1%水準で有意であった。		
Q19から			Q11		
Q8			Q11		
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.8966	2.7778	平均	3.7356	1.8889
分散	3.2147	4.4444	分散	3.4788	3.1111
観測数	174	9	観測数	174	9
プールされた分散	3.2690		プールされた分散	3.4626	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	181		自由度	181	
t	1.8101		t	2.9032	
P(T<=t) 片側	0.0360		P(T<=t) 片側	0.0021	
t 境界値 片側	1.6533		t 境界値 片側	1.6533	
P(T<=t) 両側	0.0719		P(T<=t) 両側	0.0042	
t 境界値 両側	1.9732		t 境界値 両側	1.9732	
t 検定の結果 10%水準で有意であった。			t 検定の結果 1%水準で有意であった。		

Q19から			Q20から		
Q12			Q6		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.6897	2.3333	平均	1.9231	1.3218
分散	3.5447	4	分散	3.0769	1.1906
観測数	174	9	観測数	13	174
プールされた分散	3.5649		プールされた分散	1.3130	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	181		自由度	185	
t	2.1014		t	1.8249	
P(T<=t) 片側	0.0185		P(T<=t) 片側	0.0348	
t 境界値 片側	1.6533		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0370		P(T<=t) 両側	0.0696	
t 境界値 両側	1.9732		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 5 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 0 %水準で有意であった。		
Q21から			Q7		
Q5			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定				変数 1	変数 2
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	2.5680	1.9677	平均	2.8560	2.0323
分散	3.8441	2.9825	分散	4.0114	3.1137
観測数	125	62	観測数	125	62
プールされた分散	3.5600		プールされた分散	3.7154	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	2.0481		t	2.7512	
P(T<=t) 片側	0.0210		P(T<=t) 片側	0.0033	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0420		P(T<=t) 両側	0.0065	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 5 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		
Q8			Q22から		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			Q4		
	変数 1	変数 2	t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.1360	3.2581	平均	2.7480	2.2188
分散	2.7314	3.9979	分散	2.3540	1.8879
観測数	125	62	観測数	123	64
プールされた分散	3.1490		プールされた分散	2.1953	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	3.1850		t	2.3175	
P(T<=t) 片側	0.0008		P(T<=t) 片側	0.0108	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0017		P(T<=t) 両側	0.0216	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。			t 検定の結果 5 %水準で有意であった。		
Q7			Q8		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	2.8862	2	平均	4.0894	3.3750
分散	4.0197	3.0476	分散	2.8362	3.9206
観測数	123	64	観測数	123	64
プールされた分散	3.6887		プールされた分散	3.2055	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	2.9937		t	2.5890	
P(T<=t) 片側	0.0016		P(T<=t) 片側	0.0052	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0031		P(T<=t) 両側	0.0104	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		
Q11			Q12		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.9593	3.1250	平均	3.8943	3.1250
分散	3.1049	4.0476	分散	3.2264	4.0476
観測数	123	64	観測数	123	64
プールされた分散	3.4259		プールされた分散	3.5061	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	2.9247		t	2.6657	
P(T<=t) 片側	0.0019		P(T<=t) 片側	0.0042	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0039		P(T<=t) 両側	0.0084	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q23									
Q4									
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定								
	変数 1	変数 2			変数 1	変数 2			
平均	2.6519	2.1034			平均	1.3038	1.6897		
分散	2.2793	1.8818			分散	1.1300	2.3645		
観測数	158	29			観測数	158	29		
プールの分散	2.2192				プールの分散	1.3169			
仮説平均との差異	0				仮説平均との差異	0			
自由度	185				自由度	185			
t	1.8224				t	-1.6644			
P(T<=t) 片側	0.0350				P(T<=t) 片側	0.0489			
t 境界値 片側	1.6531				t 境界値 片側	1.6531			
P(T<=t) 両側	0.0700				P(T<=t) 両側	0.0977			
t 境界値 両側	1.9729				t 境界値 両側	1.9729			
t 検定の結果	10%水準で有意であった。				t 検定の結果	10%水準で有意であった。			
Q8					Q11				
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定				t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定			
	変数 1	変数 2				変数 1	変数 2		
平均	4.0127	2.9310			平均	3.8608	2.6552		
分散	2.9935	4.1379			分散	3.2799	4.0197		
観測数	158	29			観測数	158	29		
プールの分散	3.1667				プールの分散	3.3918			
仮説平均との差異	0				仮説平均との差異	0			
自由度	185				自由度	185			
t	3.0087				t	3.2403			
P(T<=t) 片側	0.0015				P(T<=t) 片側	0.0007			
t 境界値 片側	1.6531				t 境界値 片側	1.6531			
P(T<=t) 両側	0.0030				P(T<=t) 両側	0.0014			
t 境界値 両側	1.9729				t 境界値 両側	1.9729			
t 検定の結果	1%水準で有意であった。				t 検定の結果	1%水準で有意であった。			
Q12					Q24				
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定				Q4				
	変数 1	変数 2			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定			
平均	3.8101	2.6552				変数 1	変数 2		
分散	3.3650	4.0197			平均	2.6845	1.5263		
観測数	158	29			分散	2.2771	0.8187		
プールの分散	3.4641				観測数	168	19		
仮説平均との差異	0				プールの分散	2.1352			
自由度	185				仮説平均との差異	0			
t	3.0717				自由度	185			
P(T<=t) 片側	0.0012				t	3.2747			
t 境界値 片側	1.6531				P(T<=t) 片側	0.0006			
P(T<=t) 両側	0.0024				t 境界値 片側	1.6531			
t 境界値 両側	1.9729				P(T<=t) 両側	0.0013			
t 検定の結果	1%水準で有意であった。				t 境界値 両側	1.9729			
Q11					t 検定の結果	1%水準で有意であった。			
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定				Q12				
	変数 1	変数 2			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定			
平均	3.7857	2.6842				変数 1	変数 2		
分散	3.4029	4.1170			平均	3.7619	2.4737		
観測数	168	19			分散	3.4400	3.9298		
プールの分散	3.4724				観測数	168	19		
仮説平均との差異	0				プールの分散	3.4876			
自由度	185				仮説平均との差異	0			
t	2.4422				自由度	185			
P(T<=t) 片側	0.0078				t	2.8499			
t 境界値 片側	1.6531				P(T<=t) 片側	0.0024			
P(T<=t) 両側	0.0155				t 境界値 片側	1.6531			
t 境界値 両側	1.9729				P(T<=t) 両側	0.0049			
t 検定の結果	1%水準で有意であった。				t 境界値 両側	1.9729			
Q25から					t 検定の結果	1%水準で有意であった。			
Q4					Q5				
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定				t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定			
	変数 1	変数 2				変数 1	変数 2		
平均	3.0211	2.0978			平均	2.8526	1.8696		
分散	2.3187	1.7596			分散	4.0206	2.7520		
観測数	95	92			観測数	95	92		
プールの分散	2.0437				プールの分散	3.3966			
仮説平均との差異	0				仮説平均との差異	0			
自由度	185				自由度	185			
t	4.4151				t	3.6467			
P(T<=t) 片側	0.0000				P(T<=t) 片側	0.0002			
t 境界値 片側	1.6531				t 境界値 片側	1.6531			
P(T<=t) 両側	0.00002				P(T<=t) 両側	0.0003			
t 境界値 両側	1.9729				t 境界値 両側	1.9729			
t 検定の結果	1%水準で有意であった。				t 検定の結果	1%水準で有意であった。			

Q7 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			Q8 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.0211	2.1304	平均	4.2	3.4783
分散	4.0421	3.2795	分散	2.5872	3.8127
観測数	95	92	観測数	95	92
プールされた分散	3.6670		プールされた分散	3.1900	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	3.1796		t	2.7626	
P(T<=t) 片側	0.0009		P(T<=t) 片側	0.0032	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0017		P(T<=t) 両側	0.0063	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1%水準で有意であった。			t 検定の結果 1%水準で有意であった。		
Q12 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定					
	変数 1	変数 2			
平均	4.1579	3.0870			
分散	2.6876	4.0363			
観測数	95	92			
プールされた分散	3.3510				
仮説平均との差異	0				
自由度	185				
t	3.9996				
P(T<=t) 片側	4.583E-05				
t 境界値 片側	1.6531				
P(T<=t) 両側	9.166E-05				
t 境界値 両側	1.9729				
t 検定の結果 1%水準で有意であった。					
Q26から Q4 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			Q5 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.5467	1.9107	平均	3.1333	1.8571
分散	2.0350	1.3253	分散	4.0360	2.7181
観測数	75	112	観測数	75	112
プールされた分散	1.6091557		プールされた分散	3.2453	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	8.6435		t	4.7480	
P(T<=t) 片側	1.273E-15		P(T<=t) 片側	0.0000	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	2.546E-15		P(T<=t) 両側	4.105E-06	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1%水準で有意であった。			t 検定の結果 1%水準で有意であった。		
Q7 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			Q8 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.2933	2.1071	平均	4.36	3.5
分散	3.9668	3.2317	分散	2.1795	3.7838
観測数	75	112	観測数	75	112
プールされた分散	3.5257		プールされた分散	3.1421	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	4.2340		t	3.2517	
P(T<=t) 片側	1.807E-05		P(T<=t) 片側	0.0007	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	3.613E-05		P(T<=t) 両側	0.0014	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1%水準で有意であった。			t 検定の結果 1%水準で有意であった。		
Q12 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			Q13 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.9867	3.3929	平均	4.68	4.0357
分散	3.0674	3.8803	分散	1.1935	2.9537
観測数	75	112	観測数	75	112
プールされた分散	3.5551		プールされた分散	2.2496	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	2.1108		t	2.8790	
P(T<=t) 片側	0.0181		P(T<=t) 片側	0.0022	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0361		P(T<=t) 両側	0.0045	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 5%水準で有意であった。			t 検定の結果 1%水準で有意であった。		

Q27から			Q5		
Q4			Q4		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.44	1.5632	平均	3	1.6437
分散	1.8246	0.8535	分散	4.0404	2.1855
観測数	100	87	観測数	100	87
プールのされた分散	1.3732		プールのされた分散	3.1781	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	10.9241		t	5.1894	
P(T<=t) 片側	4.674E-22		P(T<=t) 片側	2.758E-07	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	9.349E-22		P(T<=t) 両側	5.517E-07	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		
Q7			Q8		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3	2.1034	平均	4.28	3.3448
分散	4.0404	3.2334	分散	2.3855	3.9262
観測数	100	87	観測数	100	87
プールのされた分散	3.6652		プールのされた分散	3.1017	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	3.1942		t	3.6218	
P(T<=t) 片側	0.0008		P(T<=t) 片側	0.0002	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	0.0016		P(T<=t) 両側	0.0004	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		
Q12			Q13		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.16	3.0230	平均	4.56	3.9885
分散	2.6812	4.0460	分散	1.5822	3.0580
観測数	100	87	観測数	100	87
プールのされた分散	3.3156		プールのされた分散	2.2683	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	185		自由度	185	
t	4.2591		t	2.5882	
P(T<=t) 片側	1.631E-05		P(T<=t) 片側	0.0052	
t 境界値 片側	1.6531		t 境界値 片側	1.6531	
P(T<=t) 両側	3.262E-05		P(T<=t) 両側	0.0104	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		
Q30			Q7		
Q4			Q4		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.1290	2.4645	平均	4.2258	2.2645
分散	2.8495	2.0685	分散	2.5806	3.4815
観測数	31	155	観測数	31	155
プールのされた分散	2.1959		プールのされた分散	3.3346	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	184		自由度	184	
t	2.2793		t	5.4589	
P(T<=t) 片側	0.0119		P(T<=t) 片側	7.673E-08	
t 境界値 片側	1.6532		t 境界値 片側	1.6532	
P(T<=t) 両側	0.0238		P(T<=t) 両側	1.535E-07	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 5 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		
Q8			Q12		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定			t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.7419	3.6839	平均	4.6129	3.4516
分散	0.9978	3.5553	分散	1.4452	3.8207
観測数	31	155	観測数	31	155
プールのされた分散	3.1383		プールのされた分散	3.4334	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	184		自由度	184	
t	3.0357		t	3.1854	
P(T<=t) 片側	0.0014		P(T<=t) 片側	0.0008	
t 境界値 片側	1.6532		t 境界値 片側	1.6532	
P(T<=t) 両側	0.0027		P(T<=t) 両側	0.0017	
t 境界値 両側	1.9729		t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q13		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.7419	4.2
分散	0.9978	2.5766
観測数	31	155
プールされた分散	2.3192	
仮説平均との差異	0	
自由度	184	
t	1.8087	
P(T<=t) 片側	0.0361	
t 境界値 片側	1.6532	
P(T<=t) 両側	0.0721	
t 境界値 両側	1.9729	
t 検定の結果 10%水準で有意であった。		

「2、現在、どのような音楽活動をしていますか。」

この質問では、第二因子と第三因子において有意差がある。

現在、何か音楽活動をしている人は、第二因子(嗜好の因子)と第三因子(自発性の因子)の持ち主である。

「9、音楽の授業は、現在の音楽の好き・嫌いに影響していますか。」

この質問では、有意差を持つ因子がなかった。

「14、誰かから影響を受けて音楽を好きになったと言える。」

この質問では、第一因子(嗜好の因子)と第三因子(自発性の因子)において有意差がある。誰かから影響を受けて音楽を好きになった人は、第一因子と第三因子の持ち主である。

「15、映画・テレビで聞いた曲を改めて聞きたいと思ったことがある。」

この質問では、有意差を持つ因子がなかった。

「17、お気に入りのアーティストはいますか。」

この質問では、第五因子において有意差がある。

お気に入りのアーティストがいる人は、第五因子(教師の因子)持ち主である。

「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」

この質問では、第一因子において有意差がある。音楽を聴いている人は、第一因子(嗜好の因子)の持ち主である。

「20、何かをしている時に音楽を聞きますか。」

この質問では、有意差を持つ因子がなかった。

「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」

この質問では、第一因子、第二因子、第三因子において有意差がある。カラオケに行って歌う人は、第一因子（嗜好の因子）、第二因子（音楽経験の因子）、第三因子（自発性の因子）の持ち主である。

「22、音楽に合わせて体を動かすのが好きだ。」

この質問では、第一因子、第二因子、第三因子において有意差がある。音楽に合わせて体を動かす人は、第一因子（嗜好の因子）、第二因子（音楽経験の因子）、第三因子（自発性の因子）の持ち主である。

「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」

この質問では、第一因子において有意差がある。自然に拍子をとれる人は、第一因子（嗜好の因子）の持ち主である。

「24、知っている曲をラララや歌詞で歌うことができる。」

この質問では、第一因子において有意差がある。知っている曲を歌える人は、第一因子（嗜好の因子）の持ち主である。

「25、音名と階名の違いが分かる。」

この質問では、第一因子、第二因子、第三因子において有意差がある。音名と階名の違いがわかる人は、第一因子（嗜好の因子）、第二因子（音楽経験の因子）、第三因子（自発性の因子）の持ち主である。

「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」

この質問では、第一因子、第二因子、第三因子において有意差がある。ある音を聞くとその音の高さがわかる人（絶対音感の持ち主）は、第一因子（嗜好の因子）、第二因子（音楽経験の因子）、第三因子（自発性の因子）の持ち主である。

「27、楽譜を見て演奏することができる。」

この質問では、第一因子、第二因子、第三因子において有意差がある。経験の因子）、第三因子（自発性の因子）の持ち主である。

「30、音楽を生かした職業につきたい。」

この質問では、第一因子、第二因子、第三因子において有意差がある。音楽を生かした職業に就きたいと思っている人は、第一因子（嗜好の因子）、第二因子（音楽経験の因子）、第三因子（自発性の因子）の持ち主である。

(3)「(1)全調査者について各因子を持つ人と持たない人に分け、現在の音楽行動を問う各質問項目ごとの平均点を算出し、t検定を行った。」において有意差があったものと「(2)現在の音楽行動を問う各質問項目ごとに因子となった過去の音楽的経験を問う各質問項目ごとの平均点を算出しt検定を行った。」において有意差があったもの、両方に有意差が見られたものについて考察する。

第一因子に有意差があり、質問に有意差がある「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」「24、知っている曲をラララや歌詞で歌うことができる。」から、生活の中で音楽を楽しんでいる人がは、第一因子(嗜好の因子)の持ち主である。また、嗜好の因子の内容から「学校の因子」ともいえ、学校での経験が現在に生きていると言える。

第二因子、第三因子に有意差があり、質問に有意差がある「2、現在、どのような音楽活動をしていますか。」から、第二因子(音楽経験の因子)と第三因子(自発性の因子)が音楽活動をさせている。

第一因子、第三因子に有意差があり質問に有意差がある「14、誰かから影響を受けて音楽を好きになったと言える。」から、誰かから影響を受ける人は、第一因子(嗜好の因子)と第三因子(自発性の因子)の持ち主である。音楽をするのも好き、鑑賞するのも好きな人であることがわかる。

第五因子に有意差があり、質問に有意差がある「17、お気に入りのアーティストはいますか。」から、第五因子(教師の因子)が現在に生きていることがわかる。

第三節 男性についての分析

(1)被調査者のうち男性についてを各因子を持つ人と持たない人に分け、現在の音楽行動を問う各質問項目ごとの平均点を算出しt検定を行った。

第一因子						
Q17				Q19		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2	
平均	4.4286	3.2		平均	5	4.4
分散	2.0571	4.1684		分散	0	2.1474
観測数	21	20		観測数	20	20
プールされた分散	3.0857			プールされた分散	1.0737	
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0	
自由度	39			自由度	38	
t	2.2385			t	1.8311	
P(T<=t) 片側	0.0155			P(T<=t) 片側	0.0375	
t境界値 片側	1.6849			t境界値 片側	1.6860	
P(T<=t) 両側	0.0310			P(T<=t) 両側	0.0749	
t境界値 両側	2.0227			t境界値 両側	2.0244	
t検定の結果、5%水準で有意であった。				t検定の結果、10%水準で有意であった。		
Q21				Q22		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2	
平均	4.2381	3		平均	3.6667	2.6
分散	2.5905	4.2105		分散	3.7333	4.0421
観測数	21	20		観測数	21	20
プールされた分散	3.3797			プールされた分散	3.8838	
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0	
自由度	39			自由度	39	
t	2.1555			t	1.7323	
P(T<=t) 片側	0.0187			P(T<=t) 片側	0.0456	
t境界値 片側	1.6849			t境界値 片側	1.6849	
P(T<=t) 両側	0.0374			P(T<=t) 両側	0.0911	
t境界値 両側	2.0227			t境界値 両側	2.0227	
t検定の結果、5%水準で有意であった。				t検定の結果、10%水準で有意であった。		
Q23				Q24		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2	
平均	4.8095	3.4		平均	4.8095	3.8
分散	0.7619	4.0421		分散	0.7619	3.5368
観測数	21	20		観測数	21	20
プールされた分散	2.3600			プールされた分散	2.1138	
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0	
自由度	39			自由度	39	
t	2.9367			t	2.2224	
P(T<=t) 片側	0.0028			P(T<=t) 片側	0.0161	
t境界値 片側	1.6849			t境界値 片側	1.6849	
P(T<=t) 両側	0.0055			P(T<=t) 両側	0.0321	
t境界値 両側	2.0227			t境界値 両側	2.0227	
t検定の結果、1%水準で有意であった。				t検定の結果、5%水準で有意であった。		
Q27				Q30		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2	
平均	3.2857	1.8		平均	1.6667	1
分散	4.1143	2.6947		分散	2.1333	0
観測数	21	20		観測数	21	19
プールされた分散	3.4227			プールされた分散	1.1228	
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0	
自由度	39			自由度	38	
t	2.5703			t	1.9871	
P(T<=t) 片側	0.0070			P(T<=t) 片側	0.0271	
t境界値 片側	1.6849			t境界値 片側	1.6860	
P(T<=t) 両側	0.0141			P(T<=t) 両側	0.0542	
t境界値 両側	2.0227			t境界値 両側	2.0244	
t検定の結果、1%水準で有意であった。				t検定の結果、5%水準で有意であった。		

第二因子		
Q25		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	5	2.4375
分散	0	3.7421
観測数	2	64
プールの分散	3.6836	
仮説平均との差異	0	
自由度	64	
t	1.8593	
P(T<=t) 片側	0.0338	
t 境界値 片側	1.6690	
P(T<=t) 両側	0.0676	
t 境界値 両側	1.9977	

t検定の結果、10%水準で有意であった。

第三因子		
Q26		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	5	2
分散	0	3.1579
観測数	4	20
プールの分散	2.7273	
仮説平均との差異	0	
自由度	22	
t	3.3166	
P(T<=t) 片側	0.0016	
t 境界値 片側	1.7171	
P(T<=t) 両側	0.0031	
t 境界値 両側	2.0739	

t検定の結果、1%水準で有意であった。

第四因子		
Q21		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.3043	2.8182
分散	2.4032	4.3636
観測数	23	11
プールの分散	3.0158	
仮説平均との差異	0	
自由度	32	
t	2.3345	
P(T<=t) 片側	0.0130	
t 境界値 片側	1.6939	
P(T<=t) 両側	0.0260	
t 境界値 両側	2.0369	

t検定の結果、5%水準で有意であった。

Q26		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	2.5652	1.3636
分散	3.9842	1.4545
観測数	23	11
プールの分散	3.1937	
仮説平均との差異	0	
自由度	32	
t	1.8341	
P(T<=t) 片側	0.0380	
t 境界値 片側	1.6939	
P(T<=t) 両側	0.0759	
t 境界値 両側	2.0369	

t検定の結果、10%水準で有意であった。

Q30		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	1.9565	1
分散	2.8617	0
観測数	23	11
プールの分散	1.9674	
仮説平均との差異	0	
自由度	32	
t	1.8602	
P(T<=t) 片側	0.0360	
t 境界値 片側	1.6939	
P(T<=t) 両側	0.0721	
t 境界値 両側	2.0369	

t検定の結果、10%水準で有意であった。

Q30		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3	1.2222
分散	8	0.7885
観測数	2	63
プールの分散	0.9030	
仮説平均との差異	0	
自由度	63	
t	2.6047	
P(T<=t) 片側	0.0057	
t 境界値 片側	1.6694	
P(T<=t) 両側	0.0115	
t 境界値 両側	1.9983	

t検定の結果、1%水準で有意であった。

Q22		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.7826	2.4545
分散	3.5415	4.0727
観測数	23	11
プールの分散	3.7075	
仮説平均との差異	0	
自由度	32	
t	1.8815	
P(T<=t) 片側	0.0345	
t 境界値 片側	1.6939	
P(T<=t) 両側	0.0690	
t 境界値 両側	2.0369	

t検定の結果、10%水準で有意であった。

Q27		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.2609	1.7273
分散	4.1107	2.6182
観測数	23	11
プールの分散	3.6443	
仮説平均との差異	0	
自由度	32	
t	2.1914	
P(T<=t) 片側	0.0179	
t 境界値 片側	1.6939	
P(T<=t) 両側	0.0358	
t 境界値 両側	2.0369	

t検定の結果、5%水準で有意であった。

第一因子（嗜好因子）

第一因子は、

- 「17、お気に入りのアーティストはいますか。」
- 「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」
- 「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」
- 「22、音楽に合わせて体を動かすのが好きだ。」
- 「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」
- 「24、知っている曲をラララや歌詞で歌うことができる。」
- 「27、楽譜を見て演奏することができる。」
- 「30、音楽を生かした職業につきたい。」

以上の質問において有意差を持つ。

第一因子を持つ人は、積極的に音楽を楽しむ人が多い。

第二因子（音楽活動因子）

第二因子は、

- 「25、音名と階名の違いが分かる。」
- 「30、音楽を生かした職業につきたい。」

以上の質問において有意差を持つ。

第二因子を持つ人は音名と階名を理解している人が多く、音楽を生かした職業につきたいと思っている人が多い。

第三因子（勉強方法についての因子）

第三因子は、

- 「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」

以上の質問において有意差を持つ。絶対音感を持っている人が多い。

第四因子（自発性の因子）

第四因子は、

- 「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」
- 「22、音楽に合わせて体を動かすのが好きだ。」
- 「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」
- 「27、楽譜を見て演奏することができる。」
- 「30、音楽を生かした職業につきたい。」

以上の質問において有意差を持つ。

第四因子を持つ人は、音楽を積極的に楽しんでいる人が多い。

絶対音感や読譜力を持っている。音楽を生かした職業に就きたいと思っている人が多い。

(2)現在の音楽行動を問う各質問項目ごとに因子となった過去の音楽的経験を問う各質問項目ごとの平均点を算出しt検定を行った。このt検定を行って有意差を見ることによって、音楽行動している人が持っている因子や経験がわかる。

Q2から Q5 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			Q14から Q8 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	1.75	1.9298	平均	3.5946	2.8378
分散	0.2	0.0664	分散	3.7477	4.0841
観測数	16	57	観測数	37	37
プールのされた分散	0.0946		プールのされた分散	3.9159	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	71		自由度	72	
t	-2.0661		t	1.6448	
P(T<=t) 片側	0.0212		P(T<=t) 片側	0.0522	
t境界値 片側	1.6666		t境界値 片側	1.6663	
P(T<=t) 両側	0.0425		P(T<=t) 両側	0.1044	
t境界値 両側	1.9939		t境界値 両側	1.9935	
t 検定の結果 5 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 0 %水準で有意であった。		
Q17から Q4 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			Q7 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	1.5714	1	平均	2.5	1.6667
分散	1.9948	0	分散	3.8182	2.3529
観測数	56	18	観測数	56	18
プールのされた分散	1.5238		プールのされた分散	3.4722	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	72		自由度	72	
t	1.7085		t	1.6506	
P(T<=t) 片側	0.0459		P(T<=t) 片側	0.0516	
t境界値 片側	1.6663		t境界値 片側	1.6663	
P(T<=t) 両側	0.0919		P(T<=t) 両側	0.1032	
t境界値 両側	1.9935		t境界値 両側	1.9935	
t 検定の結果 1 0 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 0 %水準で有意であった。		
Q10 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			Q12 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.2143	2.7778	平均	3.3571	2.1111
分散	2.5714	4.1830	分散	3.9429	3.3987
観測数	56	18	観測数	56	18
プールのされた分散	2.9519		プールのされた分散	3.8144	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	72		自由度	72	
t	3.0858		t	2.3547	
P(T<=t) 片側	0.0014		P(T<=t) 片側	0.0106	
t境界値 片側	1.6663		t境界値 片側	1.6663	
P(T<=t) 両側	0.0029		P(T<=t) 両側	0.0213	
t境界値 両側	1.9935		t境界値 両側	1.9935	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。			t 検定の結果 5 %水準で有意であった。		
Q19から Q12 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定			Q20から Q6 t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.1493	1	平均	2.1429	1.1194
分散	4.0380	0	分散	3.8095	0.4704
観測数	67	4	観測数	7	67
プールのされた分散	3.8624		プールのされた分散	0.7486	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	69		自由度	72	
t	2.1247		t	2.9779	
P(T<=t) 片側	0.0186		P(T<=t) 片側	0.0020	
t境界値 片側	1.6672		t境界値 片側	1.6663	
P(T<=t) 両側	0.0372		P(T<=t) 両側	0.0040	
t境界値 両側	1.9949		t境界値 両側	1.9935	
t 検定の結果 5 %水準で有意であった。			t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q21から					
Q4				Q7	
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	1.4	1.7931		平均	2.6889
分散	0.6545	1.5985		分散	3.9919
観測数	45	29		観測数	45
プールされた分散	1.0216			プールされた分散	3.3590
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	72			自由度	72
t	-1.6332			t	2.2895
P(T<=t) 片側	0.0534			P(T<=t) 片側	0.0125
t 境界値 片側	1.6663			t 境界値 片側	1.6663
P(T<=t) 両側	0.1068			P(T<=t) 両側	0.0250
t 境界値 両側	1.9935			t 境界値 両側	1.9935
t 検定の結果 10%水準で有意であった。				t 検定の結果5%水準で有意であった。	
Q8				Q10	
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.5778	2.6552		平均	4.2
分散	3.7495	4.0197		分散	2.6182
観測数	45	29		観測数	45
プールされた分散	3.8546			プールされた分散	3.1632
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	72			自由度	72
t	1.9734			t	2.0192
P(T<=t) 片側	0.0261			P(T<=t) 片側	0.0236
t 境界値 片側	1.6663			t 境界値 片側	1.6663
P(T<=t) 両側	0.0523			P(T<=t) 両側	0.0472
t 境界値 両側	1.9935			t 境界値 両側	1.9935
t 検定の結果5%水準で有意であった。				t 検定の結果5%水準で有意であった。	
Q23から				Q12	
Q5				Q12	
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	1.2857	1.8889		平均	3.4286
分散	1.0805	2.9281		分散	3.8857
観測数	56	18		観測数	56
プールされた分散	1.5168			プールされた分散	3.6596
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	72			自由度	72
t	-1.8076			t	2.9705
P(T<=t) 片側	0.0374			P(T<=t) 片側	0.0020
t 境界値 片側	1.6663			t 境界値 片側	1.6663
P(T<=t) 両側	0.0748			P(T<=t) 両側	0.0040
t 境界値 両側	1.9935			t 境界値 両側	1.9935
t 検定の結果 10%水準で有意であった。				t 検定の結果 1%水準で有意であった。	
Q24から				Q12	
Q11				Q12	
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.1935	1.6667		平均	3.3226
分散	4.0275	2.4242		分散	3.9598
観測数	62	12		観測数	62
プールされた分散	3.7826			プールされた分散	3.7252
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	72			自由度	72
t	2.4893			t	2.7204
P(T<=t) 片側	0.0076			P(T<=t) 片側	0.0041
t 境界値 片側	1.6663			t 境界値 片側	1.6663
P(T<=t) 両側	0.0151			P(T<=t) 両側	0.0082
t 境界値 両側	1.9935			t 境界値 両側	1.9935
t 検定の結果 1%水準で有意であった。				t 検定の結果 1%水準で有意であった。	
Q26から					
Q4					
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定					
	変数 1	変数 2			
平均	2.2381	1.2830			
分散	2.3905	0.2837			
観測数	21	53			
プールされた分散	0.8689				
仮説平均との差異	0				
自由度	72				
t	3.9735				
P(T<=t) 片側	0.0001				
t 境界値 片側	1.6663				
P(T<=t) 両側	0.0002				
t 境界値 両側	1.9935				
t 検定の結果 1%水準で有意であった。					

Q27から					
Q4				Q5	
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定	
	変数 1	変数 2			変数 1 変数 2
平均	2.7931	1.9778		平均	3.7586 2.8667
分散	4.0985	3.0222		分散	3.5468 4.0727
観測数	29	45		観測数	29 45
プールされた分散	3.4407833			プールされた分散	3.8682
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	72			自由度	72
t	1.8458			t	1.9045
P(T<=t) 片側	0.0345			P(T<=t) 片側	0.0304
t 境界値 片側	1.6663			t 境界値 片側	1.6663
P(T<=t) 両側	0.0690			P(T<=t) 両側	0.0608
t 境界値 両側	1.9935			t 境界値 両側	1.9935
t 検定の結果 10%水準で有意であった。			t 検定の結果 10%水準で有意であった。		
Q12				Q13	
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定	
	変数 1	変数 2			変数 1 変数 2
平均	3.8966	2.5111		平均	4.7241 4.1111
分散	3.3103	3.8465		分散	1.0640 2.8283
観測数	29	45		観測数	29 45
プールされた分散	3.6380			プールされた分散	2.1422
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	72			自由度	72
t	3.0503			t	1.7589
P(T<=t) 片側	0.0016			P(T<=t) 片側	0.0414
t 境界値 片側	1.6663			t 境界値 片側	1.6663
P(T<=t) 両側	0.0032			P(T<=t) 両側	0.0828
t 境界値 両側	1.9935			t 境界値 両側	1.9935
t 検定の結果 1%水準で有意であった。			t 検定の結果 10%水準で有意であった。		
Q30から				Q7	
Q5				Q7	
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定	
	変数 1	変数 2			変数 1 変数 2
平均	3	1.2462		平均	4.5 2.0462
分散	4.5714	0.9385		分散	2 3.1385
観測数	8	65		観測数	8 65
プールされた分散	1.2966			プールされた分散	3.0262
仮説平均との差異	0			仮説平均との差異	0
自由度	71			自由度	71
t	4.1108			t	3.7648
P(T<=t) 片側	0.0001			P(T<=t) 片側	0.0002
t 境界値 片側	1.6666			t 境界値 片側	1.6666
P(T<=t) 両側	0.0001			P(T<=t) 両側	0.0003
t 境界値 両側	1.9939			t 境界値 両側	1.9939
t 検定の結果 1%水準で有意であった。			t 検定の結果 1%水準で有意であった。		
Q8					
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定					
	変数 1	変数 2			
平均	4.5	3.0923			
分散	2	4.0538			
観測数	8	65			
プールされた分散	3.8514				
仮説平均との差異	0				
自由度	71				
t	1.9144				
P(T<=t) 片側	0.0298				
t 境界値 片側	1.6666				
P(T<=t) 両側	0.0596				
t 境界値 両側	1.9939				
t 検定の結果 5%水準で有意であった。					

「17、お気に入りのアーティストはいますか。」

この質問は、第一因子において有意差がある。お気に入りのアーティストがいる人は、第一因子（嗜好の因子）の持ち主である。

「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」

この質問は、第一因子において有意差がある。音楽を聴く人は、第一因子（嗜好の因子）の持ち主である。

「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」

この質問は、第一因子、第四因子において有意差がある。カラオケに行って歌うのが好きな人は、第一因子（嗜好の因子）、第四因子（自発性の因子）の持ち主である。

「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」

この質問は、第一因子において有意差がある。自然に拍子をとれる人は、第一因子（嗜好の因子）の持ち主である。

「24、知っている曲をラララや歌詞で歌うことができる。」

この質問は、第一因子において有意差がある。知っている曲を歌うことができる人は、第一因子（嗜好の因子）の持ち主である。

「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」

この質問は、第三因子において有意差がある。聞いた音の高さがわかる（絶対音感）人は、第三因子（学習方法についての因子）の持ち主である。

「27、楽譜を見て演奏することができる。」

この質問は、第一因子において有意差がある。楽譜を見て演奏できる人は、第一因子（嗜好の因子）の持ち主である。

「30、音楽を生かした職業につきたい。」

この質問は、第一因子と第二因子において有意差がある。音楽を生かした職業に就きたいと思っている人は、第一因子（嗜好の因子）と第三因子（音楽活動の因子）の持ち主である。

(3)「2、被調査者を各因子を持つ人と持たない人に分け、現在の音楽行動を問う各質問項目ごとの平均点を算出し、t検定を行った。」において有意差があったものと「3、現在の音楽行動を問う各質問項目ごとに因子となった過去の音楽的経験を問う各質問項目ごとの平均点を算出しt検定を行った。」において有意差があったもの、両方に有意差が見られたものについて考える。

第一因子に有意差があり、質問に有意差がある。「17、お気に入りのアーティストはいますか。」「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」「21、カラオケに行き歌うのが好きである。」「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」「24、知っている曲をラララや歌詞で歌うことができる。」「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」「27、楽譜を見て演奏することができる。」から、第一因子(嗜好の因子)が積極的に音楽行動をさせている。

第一因子と第二因子に有意差があり、質問「30、音楽を生かした職業につきたい。」に有意差があることから、音楽を生かした職業につきたいと思っている人は、第一因子(嗜好の因子)と第二因子(音楽活動の因子)の持ち主である。

第三因子に有意差があり、質問「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」に有意差があることから、聞いた音の高さがわかる人、つまり絶対音感の持ち主は、第三因子(音楽活動)の経験に影響されている。

第一因子と第四因子に有意差があり、質問「21、カラオケに行き歌うのが好きである。」に有意差があることから、カラオケに行き歌うのが好きな人は、第一因子(嗜好の因子)と第四因子(自発性の因子)に影響されている。

第四節 女性についての分析

(1)被調査者のうち女性について、各因子を持つ人と持たない人に分け、現在の音楽行動を問う各質問項目ごとの平均点を算出し、t検定を行った。

第一因子					
Q15				Q17	
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定				t検定: 等分散を仮定した2標本による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	5	4.6	平均	1.2949	1.6
分散	0	1.6	分散	0.2106	0.2667
観測数	78	10	観測数	78	10
プールされた分散	0.1674		プールされた分散	0.2165	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	86		自由度	86	
t	2.9103		t	-1.9524	
P(T<=t) 片側	0.0023		P(T<=t) 片側	0.0271	
t境界値 片側	1.6628		t境界値 片側	1.6628	
P(T<=t) 両側	0.0046		P(T<=t) 両側	0.0541	
t境界値 両側	1.9879		t境界値 両側	1.9879	
t検定の結果、1%水準で有意であった。			t検定の結果、5%水準で有意であった。		
Q19			Q22		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.9481	4.2	平均	4.1282	3
分散	0.2078	2.8444	分散	2.7626	4.4444
観測数	77	10	観測数	78	10
プールされた分散	0.4870		プールされた分散	2.9386	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	85		自由度	86	
t	3.1891		t	1.9594	
P(T<=t) 片側	0.0010		P(T<=t) 片側	0.0267	
t境界値 片側	1.6630		t境界値 片側	1.6628	
P(T<=t) 両側	0.0020		P(T<=t) 両側	0.0533	
t境界値 両側	1.9883		t境界値 両側	1.9879	
t検定の結果、1%水準で有意であった。			t検定の結果、5%水準で有意であった。		
Q23			Q25		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.7436	3.4	平均	3.6154	2.2
分散	0.9724	4.2667	分散	3.6683	3.7333
観測数	78	10	観測数	78	10
プールされた分散	1.3171		プールされた分散	3.6751	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	86		自由度	86	
t	3.4855		t	2.1981	
P(T<=t) 片側	0.0004		P(T<=t) 片側	0.0153	
t境界値 片側	1.6628		t境界値 片側	1.6628	
P(T<=t) 両側	0.0008		P(T<=t) 両側	0.0306	
t境界値 両側	1.9879		t境界値 両側	1.9879	
t検定の結果、1%水準で有意であった。			t検定の結果、5%水準で有意であった。		
Q26					
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定					
	変数 1	変数 2			
平均	3.1026	1.8			
分散	4.0413	2.8444			
観測数	78	10			
プールされた分散	3.9160				
仮説平均との差異	0				
自由度	86				
t	1.9597				
P(T<=t) 片側	0.0266				
t境界値 片側	1.6628				
P(T<=t) 両側	0.0533				
t境界値 両側	1.9879				
t検定の結果、5%水準で有意であった。					

第二因子		
Q19		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	5	4.68
分散	0	1.2267
観測数	44	25
プールされた分散	0.4394	
仮説平均との差異	0	
自由度	67	
t	1.9275	
P(T<=t) 片側	0.0291	
t 境界値 片側	1.6679	
P(T<=t) 両側	0.0582	
t 境界値 両側	1.9960	
t 検定の結果、5 %水準で有意であった。		

Q25		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.9333	2.6
分散	3.2	4
観測数	45	25
プールされた分散	3.4824	
仮説平均との差異	0	
自由度	68	
t	2.8644	
P(T<=t) 片側	0.0028	
t 境界値 片側	1.6676	
P(T<=t) 両側	0.0056	
t 境界値 両側	1.9955	
t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		

Q27		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.8222	1.32
分散	0.6949	1.2267
観測数	45	25
プールされた分散	0.8826	
仮説平均との差異	0	
自由度	68	
t	14.9446	
P(T<=t) 片側	1.797E-23	
t 境界値 片側	1.6676	
P(T<=t) 両側	3.594E-23	
t 境界値 両側	1.9955	
t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		

第三因子		
Q14		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.1333	2
分散	4.0727	3.2
観測数	45	16
プールされた分散	3.8508	
仮説平均との差異	0	
自由度	59	
t	1.9842	
P(T<=t) 片側	0.0259	
t 境界値 片側	1.6711	
P(T<=t) 両側	0.0519	
t 境界値 両側	2.0010	
t 検定の結果、5 %水準で有意であった。		

Q25		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.0222	2.75
分散	3.0222	4.2
観測数	45	16
プールされた分散	3.3217	
仮説平均との差異	0	
自由度	59	
t	2.3982	
P(T<=t) 片側	0.0098	
t 境界値 片側	1.6711	
P(T<=t) 両側	0.0197	
t 境界値 両側	2.0010	
t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		

Q21		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.2889	3.08
分散	2.3919	4.16
観測数	45	25
プールされた分散	3.0159	
仮説平均との差異	0	
自由度	68	
t	2.7906	
P(T<=t) 片側	0.0034	
t 境界値 片側	1.6676	
P(T<=t) 両側	0.0068	
t 境界値 両側	1.9955	
t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		

Q26		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.2	1.16
分散	2.6182	0.64
観測数	45	25
プールされた分散	1.92	
仮説平均との差異	0	
自由度	68	
t	8.7953	
P(T<=t) 片側	3.955E-13	
t 境界値 片側	1.6676	
P(T<=t) 両側	7.911E-13	
t 境界値 両側	1.9955	
t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		

Q19		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	5	4.75
分散	0	1
観測数	45	16
プールされた分散	0.2542	
仮説平均との差異	0	
自由度	59	
t	1.7034	
P(T<=t) 片側	0.0469	
t 境界値 片側	1.6711	
P(T<=t) 両側	0.0938	
t 境界値 両側	2.0010	
t 検定の結果、10 %水準で有意であった。		

Q26		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.7556	1.5
分散	3.5071	1.8667
観測数	45	16
プールされた分散	3.0900	
仮説平均との差異	0	
自由度	59	
t	4.4083	
P(T<=t) 片側	2.236E-05	
t 境界値 片側	1.6711	
P(T<=t) 両側	4.472E-05	
t 境界値 両側	2.0010	
t 検定の結果、1 %水準で有意であった。		

Q27			Q30		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.022	2.5	平均	2.511	1
分散	3.022	4	分散	3.846	0
観測数	45	16	観測数	45	16
プールされた分散	3.271		プールされた分散	2.869	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	59		自由度	59	
t	2.892		t	3.065	
P(T<=t) 片側	0.003		P(T<=t) 片側	0.002	
t境界値 片側	1.671		t境界値 片側	1.671	
P(T<=t) 両側	0.005		P(T<=t) 両側	0.003	
t境界値 両側	2.001		t境界値 両側	2.001	
t検定の結果、1%水準で有意であった。			t検定の結果、1%水準で有意であった。		
第四因子					
Q15			Q23		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	5	4.822	平均	4.7	4.2
分散	0	0.695	分散	1.124	2.618
観測数	80	45	観測数	80	45
プールされた分散	0.249		プールされた分散	1.659	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	123		自由度	123	
t	1.913		t	2.084	
P(T<=t) 片側	0.029		P(T<=t) 片側	0.020	
t境界値 片側	1.657		t境界値 片側	1.657	
P(T<=t) 両側	0.058		P(T<=t) 両側	0.039	
t境界値 両側	1.979		t境界値 両側	1.979	
t検定の結果、5%水準で有意であった。			t検定の結果、5%水準で有意であった。		
第五因子					
Q9			Q23		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.6667	2.3333	平均	3.6667	4.5556
分散	3.8788	3.6923	分散	3.8788	1.6410
観測数	12	27	観測数	12	27
プールされた分散	3.7477		プールされた分散	2.3063	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	37		自由度	37	
t	1.9852		t	-1.6871	
P(T<=t) 片側	0.0273		P(T<=t) 片側	0.0500	
t境界値 片側	1.6871		t境界値 片側	1.6871	
P(T<=t) 両側	0.0546		P(T<=t) 両側	0.1000	
t境界値 両側	2.0262		t境界値 両側	2.0262	
t検定の結果、5%水準で有意であった。			t検定の結果、10%水準で有意であった。		
Q25			Q26		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4	2.4815	平均	3.3333	2.1852
分散	3.2727	3.8746	分散	4.2424	3.4644
観測数	12	27	観測数	12	27
プールされた分散	3.6957		プールされた分散	3.6957	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	37		自由度	37	
t	2.2767		t	1.7214	
P(T<=t) 片側	0.0143		P(T<=t) 片側	0.0468	
t境界値 片側	1.6871		t境界値 片側	1.6871	
P(T<=t) 両側	0.0287		P(T<=t) 両側	0.0935	
t境界値 両側	2.0262		t境界値 両側	2.0262	
t検定の結果、5%水準で有意であった。			t検定の結果、10%水準で有意であった。		
Q30					
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定					
	変数 1	変数 2			
平均	2.3333	1.1481			
分散	3.8788	0.5926			
観測数	12	27			
プールされた分散	1.5696				
仮説平均との差異	0				
自由度	37				
t	2.7267				
P(T<=t) 片側	0.0049				
t境界値 片側	1.6871				
P(T<=t) 両側	0.0097				
t境界値 両側	2.0262				
t検定の結果、1%水準で有意であった。					

第一因子（嗜好因子）

第一因子は、

「15、映画・テレビで聞いた曲を改めて聞きたいと思ったことがある。」

「17、お気に入りのアーティストはいますか。」

「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」

「22、音楽に合わせて体を動かすのが好きだ。」

「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」

「25、音名と階名の違いが分かる。」

「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」

以上の質問において有意差を持つ。

第一因子を持つ人は、積極的に音楽を楽しむ人が多い。

基本的な音楽能力は身に付いている。

第二因子（音楽経験因子）

第二因子は、

「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」

「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」

「25、音名と階名の違いが分かる。」

「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」

「27、楽譜を見て演奏することができる。」

以上の質問において有意差を持つ。

第二因子を持つ人は、音楽を積極的に楽しんでいる人が多い。

絶対音感や読譜力を持っている。

第三因子（自主性因子）

第三因子は、

「14、誰かから影響を受けて音楽を好きになったと言える。」

「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」

「25、音名と階名の違いが分かる。」

「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」

「27、楽譜を見て演奏することができる。」

「30、音楽を生かした職業につきたい。」

以上の質問において有意差を持つ。

第三因子を持つ人は、音楽を積極的に楽しんでいる人が多い。

第四因子（教師の因子）

第四因子は、

「15、映画・テレビで聞いた曲を改めて聞きたいと思ったことがある。」

「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」

以上の質問において有意差を持つ。

日常生活の中で音楽を感じる人が多い。

第五因子（発表の因子）

第五因子は、

「9、音楽の授業は、現在の音楽の好き・嫌いに影響していますか。」

「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」

「25、音名と階名の違いが分かる。」

「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」

「30、音楽を生かした職業につきたい。」

以上の質問に有意差を持つ。

第五因子を持つ人は、音楽の授業に影響されている人が多い。

(2)現在の音楽行動を問う各質問項目ごとに因子となった過去の音楽的経験を問う各質問項目ごとの平均点を算出しt検定を行った。このt検定を行って有意差を見ることによって、音楽行動をしている人が持っている因子や経験がわかる。

Q2から			Q5		
Q4			Q4		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数1	変数2		変数1	変数2
平均	4.3684	3.5957	平均	1.2105	1.5638
分散	2.2456	3.6843	分散	0.1754	0.2486
観測数	19	94	観測数	19	94
プールされた分散	3.4510		プールされた分散	0.2367	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	111	
t	1.6536		t	-2.8870	
P(T<=t) 片側	0.0505		P(T<=t) 片側	0.0023	
t境界値 片側	1.6587		t境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.1010		P(T<=t) 両側	0.0047	
t境界値 両側	1.9816		t境界値 両側	1.9816	
t検定の結果10%水準で有意であった。			t検定の結果1%水準で有意であった。		
Q7			Q13		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数1	変数2		変数1	変数2
平均	1.3684	1.5957	平均	1.0526	1.2128
分散	0.2456	0.2434	分散	0.0526	0.1693
観測数	19	94	観測数	19	94
プールされた分散	0.2438		プールされた分散	0.1504	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	111	
t	-1.8304		t	-1.6417	
P(T<=t) 片側	0.0349		P(T<=t) 片側	0.0517	
t境界値 片側	1.6587		t境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0699		P(T<=t) 両側	0.1035	
t境界値 両側	1.9816		t境界値 両側	1.9816	
t検定の結果10%水準で有意であった。			t検定の結果10%水準で有意であった。		
Q14から			Q8		
Q7			Q8		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数1	変数2		変数1	変数2
平均	3.3478	2.3731	平均	4.5652	4.0448
分散	3.9652	3.6617	分散	1.5845	2.9525
観測数	46	67	観測数	46	67
プールされた分散	3.7847		プールされた分散	2.3979	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	111	
t	2.6165		t	1.7552	
P(T<=t) 片側	0.0051		P(T<=t) 片側	0.0410	
t境界値 片側	1.6587		t境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0101		P(T<=t) 両側	0.0820	
t境界値 両側	1.9816		t境界値 両側	1.9816	
t検定の結果1%水準で有意であった。			t検定の結果10%水準で有意であった。		
Q17から			Q19から		
Q4			Q11		
t検定: 等分散を仮定した2標本による検定			t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数1	変数2		変数1	変数2
平均	3.5802	2.9063	平均	4.2523	1.8
分散	2.5466	3.4425	分散	2.4546	3.2
観測数	81	32	観測数	107	5
プールされた分散	2.7968		プールされた分散	2.4817	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	110	
t	1.9302		t	3.4023	
P(T<=t) 片側	0.0281		P(T<=t) 片側	0.0005	
t境界値 片側	1.6587		t境界値 片側	1.6588	
P(T<=t) 両側	0.0561		P(T<=t) 両側	0.0009	
t境界値 両側	1.9816		t境界値 両側	1.9818	
t検定の結果5%水準で有意であった。			t検定の結果1%水準で有意であった。		

Q20から			Q21から		
Q5			Q4		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定		t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.3333	2.9065	平均	3.375	2.8788
分散	2.6667	4.0289	分散	1.7310	2.2973
観測数	6	107	観測数	80	33
プールされた分散	3.9676		プールされた分散	1.8943	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	111	
t	1.7074		t	1.7426	
P(T<=t) 片側	0.0453		P(T<=t) 片側	0.0421	
t 境界値 片側	1.6587		t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0905		P(T<=t) 両側	0.0842	
t 境界値 両側	1.9816		t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 10%水準で有意であった。			t 検定の結果 10%水準で有意であった。		
Q5			Q8		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定		t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.2	2.4545	平均	4.45	3.7879
分散	4.0101	3.8182	分散	1.9215	3.4848
観測数	80	33	観測数	80	33
プールされた分散	3.9548		プールされた分散	2.3722	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	111	
t	1.8118		t	2.0779	
P(T<=t) 片側	0.0364		P(T<=t) 片側	0.0200	
t 境界値 片側	1.6587		t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0727		P(T<=t) 両側	0.0400	
t 境界値 両側	1.9816		t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 10%水準で有意であった。			t 検定の結果 5%水準で有意であった。		
Q22から			Q7		
Q4			Q7		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定		t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	3.3976	2.7667	平均	3.0241	2.0667
分散	1.9254	1.7023	分散	4.0482	3.2368
観測数	83	30	観測数	83	30
プールされた分散	1.8671		プールされた分散	3.8362	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	111	
t	2.1675		t	2.2947	
P(T<=t) 片側	0.0162		P(T<=t) 片側	0.0118	
t 境界値 片側	1.6587		t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0323		P(T<=t) 両側	0.0236	
t 境界値 両側	1.9816		t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 5%水準で有意であった。			t 検定の結果 5%水準で有意であった。		
Q11			Q12		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定		t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	4.3253	3.6667	平均	4.1807	3.5333
分散	2.2709	3.6782	分散	2.6377	3.8437
観測数	83	30	観測数	83	30
プールされた分散	2.6386		プールされた分散	2.9528	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	111	
t	1.9034		t	1.7685	
P(T<=t) 片側	0.0298		P(T<=t) 片側	0.0399	
t 境界値 片側	1.6587		t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0596		P(T<=t) 両側	0.0797	
t 境界値 両側	1.9816		t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 5%水準で有意であった。			t 検定の結果 10%水準で有意であった。		
Q23から			Q8		
Q6			Q8		
t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定		t-検定: 等分散を仮定した 2 標本	による検定	
	変数 1	変数 2		変数 1	変数 2
平均	1.3529	2.4545	平均	4.3725	3.1818
分散	1.2999	4.0727	分散	2.1371	4.3636
観測数	102	11	観測数	102	11
プールされた分散	1.5497		プールされた分散	2.3377	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	111		自由度	111	
t	-2.7884		t	2.4540	
P(T<=t) 片側	0.0031		P(T<=t) 片側	0.0078	
t 境界値 片側	1.6587		t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0062		P(T<=t) 両側	0.0157	
t 境界値 両側	1.9816		t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 1%水準で有意であった。			t 検定の結果 1%水準で有意であった。		

Q11 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.2549	3.1818
分散	2.4492	4.3636
観測数	102	11
プールされた分散	2.6217	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	2.0883	
P(T<=t) 片側	0.0195	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0391	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 5 %水準で有意であった。		

Q4 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.4627	2.8913
分散	1.9493	1.7435
観測数	67	46
プールされた分散	1.8659	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	2.1845	
P(T<=t) 片側	0.0155	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0310	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 5 %水準で有意であった。		

Q7 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.2090	2.1304
分散	4.0163	3.3159
観測数	67	46
プールされた分散	3.7324	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	2.9155	
P(T<=t) 片側	0.0021	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0043	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q12 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.4030	3.4348
分散	2.0624	3.8957
観測数	67	46
プールされた分散	2.8056	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	3.0188	
P(T<=t) 片側	0.0016	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0031	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q5 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.8889	2.1525
分散	3.2704	3.3384
観測数	54	59
プールされた分散	3.3060	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	5.0707	
P(T<=t) 片側	7.997E-07	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	1.599E-06	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q8 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.7037	3.8475
分散	1.1181	3.3384
観測数	54	59
プールされた分散	2.2783	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	3.0122	
P(T<=t) 片側	0.0016	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0032	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q13 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.1765	5
分散	2.6418	0
観測数	102	11
プールされた分散	2.4038	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	-1.6737	
P(T<=t) 片側	0.0485	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0970	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 10 %水準で有意であった。		

Q5 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.3284	2.4783
分散	3.9512	3.8106
観測数	67	46
プールされた分散	3.8942	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	2.2498	
P(T<=t) 片側	0.0132	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0264	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 5 %水準で有意であった。		

Q8 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.6418	3.6957
分散	1.3243	3.5942
観測数	67	46
プールされた分散	2.2445	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	3.2981	
P(T<=t) 片側	0.0007	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0013	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q4 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	4.0556	2.4746
分散	0.9969	1.5985
観測数	54	59
プールされた分散	1.3112	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	7.3312	
P(T<=t) 片側	0.0000	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	0.0000	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q7 t検定: 等分散を仮定した2標本による検定		
	変数 1	変数 2
平均	3.5185	2.0847
分散	3.8015	3.2168
観測数	54	59
プールされた分散	3.4960	
仮説平均との差異	0	
自由度	111	
t	4.0717	
P(T<=t) 片側	4.389E-05	
t 境界値 片側	1.6587	
P(T<=t) 両側	8.777E-05	
t 境界値 両側	1.9816	
t 検定の結果 1 %水準で有意であった。		

Q27から					Q5				
Q4					Q5				
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定					t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				
	変数 1	変数 2				変数 1	変数 2		
平均	3.9577	2			平均	3.5915	1.9524		
分散	0.9839	1.1220			分散	3.7022	2.9733		
観測数	71	42			観測数	71	42		
プールされた分散	1.0349				プールされた分散	3.4330			
仮説平均との差異	0				仮説平均との差異	0			
自由度	111				自由度	111			
t	9.8861				t	4.5447			
P(T<=t) 片側	3.279E-17				P(T<=t) 片側	7.041E-06			
t 境界値 片側	1.6587				t 境界値 片側	1.6587			
P(T<=t) 両側	6.558E-17				P(T<=t) 両側	1.408E-05			
t 境界値 両側	1.9816				t 境界値 両側	1.9816			
t 検定の結果 1%水準で有意であった。					t 検定の結果 1%水準で有意であった。				
Q7					Q13				
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定					t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				
	変数 1	変数 2				変数 1	変数 2		
平均	3.0845	2.2381			平均	4.4930	3.8571		
分散	4.0499	3.5029			分散	1.7964	3.3449		
観測数	71	42			観測数	71	42		
プールされた分散	3.8479				プールされた分散	2.3684			
仮説平均との差異	0				仮説平均との差異	0			
自由度	111				自由度	111			
t	2.2166				t	2.1224			
P(T<=t) 片側	0.0143				P(T<=t) 片側	0.0180			
t 境界値 片側	1.6587				t 境界値 片側	1.6587			
P(T<=t) 両側	0.0287				P(T<=t) 両側	0.0360			
t 境界値 両側	1.9816				t 境界値 両側	1.9816			
t 検定の結果 5%水準で有意であった。					t 検定の結果 5%水準で有意であった。				
Q30から					Q7				
Q4					Q7				
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定					t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				
	変数 1	変数 2				変数 1	変数 2		
平均	3.7391	3.1			平均	4.1304	2.4222		
分散	2.2925	1.7764			分散	2.8458	3.7074		
観測数	23	90			観測数	23	90		
プールされた分散	1.8787				プールされた分散	3.5366			
仮説平均との差異	0				仮説平均との差異	0			
自由度	111				自由度	111			
t	1.9958				t	3.8877			
P(T<=t) 片側	0.0242				P(T<=t) 片側	8.635E-05			
t 境界値 片側	1.6587				t 境界値 片側	1.6587			
P(T<=t) 両側	0.0484				P(T<=t) 両側	0.0002			
t 境界値 両側	1.9816				t 境界値 両側	1.9816			
t 検定の結果 5%水準で有意であった。					t 検定の結果 1%水準で有意であった。				
Q8					Q12				
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定					t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定				
	変数 1	変数 2				変数 1	変数 2		
平均	4.8261	4.1111			平均	4.8261	3.8		
分散	0.6957	2.7965			分散	0.6957	3.3978		
観測数	23	90			観測数	23	90		
プールされた分散	2.3801				プールされた分散	2.8622			
仮説平均との差異	0				仮説平均との差異	0			
自由度	111				自由度	111			
t	1.9835				t	2.5959			
P(T<=t) 片側	0.0249				P(T<=t) 片側	0.0054			
t 境界値 片側	1.6587				t 境界値 片側	1.6587			
P(T<=t) 両側	0.0498				P(T<=t) 両側	0.0107			
t 境界値 両側	1.9816				t 境界値 両側	1.9816			
t 検定の結果 5%水準で有意であった。					t 検定の結果 1%水準で有意であった。				
Q13									
t-検定: 等分散を仮定した2標本による検定									
	変数 1	変数 2							
平均	4.8261	4.1111							
分散	0.6957	2.7965							
観測数	23	90							
プールされた分散	2.3801								
仮説平均との差異	0								
自由度	111								
t	1.9835								
P(T<=t) 片側	0.0249								
t 境界値 片側	1.6587								
P(T<=t) 両側	0.0498								
t 境界値 両側	1.9816								
t 検定の結果 5%水準で有意であった。									

「2、現在、どのような音楽活動をしていますか。」

この質問は、第二因子と第三因子において有意差がある。第二因子(音楽経験の因子)と第三因子(自発性の因子)の持ち主である。

「14、誰かから影響を受けて音楽を好きになったと言える。」

この質問は、第三因子において有意差がある。第三因子(自発性の因子)の持ち主である。

「19、音楽を聴きたくて聴いている時がある。」

この質問は、第一因子において有意差がある。第一因子(嗜好の因子)の持ち主である。

「21、カラオケに行って歌うのが好きである。」

この質問は、第二因子において有意差がある。第二因子(経験の因子)の持ち主である。

「23、好きな曲が流れると自然に拍子をとったり、歌ったりする。」

この質問は、第一因子において有意差がある。第一因子(嗜好の因子)の持ち主である。

「25、音名と階名の違いが分かる。」

この質問は、第一因子と第二因子と第三因子と第五因子において有意差がある。第一因子(嗜好の因子)と第二因子(音楽経験の因子)と第三因子(自発性の因子)と第五因子(発表の因子)の持ち主である。

「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」

この質問は、第一因子と第二因子と第三因子において有意差がある。第一因子(嗜好の因子)と第二因子(音楽経験の因子)と第三因子(自発性の因子)の持ち主である。

「27、楽譜を見て演奏することができる。」

この質問は、第二因子と第三因子において有意差がある。楽譜を見て演奏できる人は、第二因子(音楽経験の因子)と第三因子(自発性の因子)の持ち主である。

「30、音楽を生かした職業につきたい。」

この質問は、第三因子と第五因子において有意差がある。第三因子(自発性の因子)と第五因子(発表の因子)の持ち主である。

第三章 考察

全体的に見ると、広く浅く音楽を楽しんでいる人が多い。やはりマス・メディアの影響を多くの人が受けているが、音楽を生活に取り入れる手段の一つとして利用しているにとどまっている。

第一因子は、質問9「音楽の授業は、現在の好き嫌いに影響していますか。」質問14「誰かから影響を受けて音楽を好きになったと言える。」質問15「映画・テレビで聞いた曲を改めて聞きたいと思ったことがある。」の質問において有意差が見られなかった。このことから、どこから影響を受けたかは現在に関係ないことが分かる。それはいつどこでも音楽を受け入れられる状態である。それは、音楽に対して柔軟であるとも言える。質問14の中の質問で「影響を受けた人は誰ですか。」の結果は、一番多かったのが友人、その次に親、兄弟、学校の教師、その他(好きな歌手等)であった。

「学校で音楽のクラブに入っていた。」「地域の音楽の催し物に興味・関心があった。」「大学生になるまでに生の演奏を聴きに行った。」これらの自発性の因子を中心とした音楽経験の因子を持っている人が、現在具体的な楽器を用いた活動や団体に所属しての音楽活動をしている人である。質問19「音楽を聴きたくて聴いている時がある。」で聴いていると答えた人は「学校の音楽の授業は好きだった。」「学校での音楽鑑賞会が楽しかった。」「音楽会等の人前での経験が楽しかった。」等の嗜好の因子を持っている。学校での経験では生活の中で音楽を聴いているという行動が見えてくる。つまり、学校全体で行われる音楽経験では現在の具体的な音楽活動につながりにくい。

しかし、生活の中で自然に音楽を楽しんでいる人が多いので、学校での経験が楽しい、好きであることがとても大切なことを示している。このことから学校での経験は、現在の生活の中に影響を与えているといえる。

男性と女性に分けて考えてみる。

男性は、質問30の「音楽を生かした職業につきたいと思っている。」で、就きたいと考えている人が、第一因子(嗜好の因子)を持っている。

また、質問27の「27、楽譜を見て演奏することができる。」で、できると答えた人の因子が第一因子と強く結びつけていると言えることから、男性にとって嗜好の因子が音楽行動を起こすきっかけになっていることが分かる。

従って、男性は第一因子(嗜好の因子)の影響が非常に強いと言える。

また、第一因子は嗜好の因子でもあるが、「学校」が共通しているので学校の因子とも言える。この第一因子以外の因子があまり影響を与えていないことから、男性の場合学校での音楽活動が楽しく、好きなものである必要がある。

女性は、質問30「30、音楽を生かした職業につきたい。」で就きたいと答えた人は、自発性の因子と発表の因子を持っている。音楽経験が、学校以外の場で多かったこと、積極的に音楽活動に加わっていたことが分かる。

質問26「26、ある音を聞くとその音の高さが分かる。」で分かることと答えた絶対音感の保持者が、嗜好の因子と音楽経験の因子と自発性の因子を持っている。このことは、絶対音感の保持者が音楽経験を受ける機会が多くあったと言える。

質問26と同様に質問25「25、音名と階名の違いが分かる。」で分かることと答えた人は、嗜好の因子と音楽経験の因子と自発の因子と発表の因子を持っている。このことも音楽経験を受ける機会が多くあったと言え、音楽理論を理解する気持ちがあったことを示している。

女性の場合、経験の因子や自発の因子によって現在の音楽行動に差が生まれることが多いことが分かる。実際に何か音楽活動を起こしている人は、音楽経験の因子と自発性の因子を持っている。以前から音楽の演奏会に出かけていた人は、自分でも活動したくなることが多いと同時に音楽経験のある人が行動を起こしやすい状況にあるといえる。

男性と女性を比べてみると、女性はおけいこ等の音楽経験によって差が生まれやすいことが分かった。男性は、おけいこごとの経験が音楽活動に与える影響は少なく、絶対音感を身につけるのに影響しているだけである。

質問27の「27、楽譜を見て演奏することができる。」について男性は、嗜好の因子を持っている。女性は、音楽経験の因子と自発性の因子を持っている。このことから、女性が多くの音楽経験と音楽に興味を持っていないと獲得できないものなのに対して、男性は嗜好の経験で手に入れることができる。男性は、音楽が好きだから自分の意志で学ぼうとする意欲が強いことが読みとれる。教えられるよりも学んでいくのである。

第四章 まとめ

この経験をした人は、現在こういう音楽行動をしていると断定はできないが、この様な傾向はあるということ是可以する。それらの多くの経験の中で、学校での音楽経験が多くの範囲を占めていることが明らかになった。

しかし、この学校での音楽経験は「楽しかった」という感情についての経験が生きているのである。技術や音楽能力については学校での経験だけでは身につけにくい。

では、学校での音楽教育はどこまで将来の音楽との関わりを考慮に入れて行えばいいのか。この研究の結果から、音楽を楽しむきっかけを作るのが学校の音楽の役割の一つだと考えられる。

今回調査を行ったのは、大学生である。彼らの身の周りは、膨大な量の情報が流れていて、流行の入れ替わりがめまぐるしい。音楽について望めばいくらかでも情報が入ってくる。このような状況の中でいったいどれだけの人が、自分自身が望んでいる音楽を手に入れているだろうか。

自分が楽しみたい音楽を持って、選んだ音楽を楽しむ環境を作れる人物を育てるのが学校の音楽に求められていると思う。今流行しているから等音楽を聴いたり行動を起こす理由はどんな内容でもいいが、音楽に共感できる心を持った人物が音楽を楽しんでいる人である。

これからは、具体的にどのような学習が、このような人物を育てるのが探っていきたい。

参考文献

- ・文部省：「小学校指導書 音楽編」教育芸術社 1993
- ・マーセル著、美田節子訳：「音楽教育と人間形成」音楽之友社 1967
マーセル著、美田節子訳：「音楽的成長のための教育」音楽之友社 1971
- ・ルードルフ.E.ラドシー、J.デーヴィス.ボイル共著
徳丸吉彦、藤田芙美子、北川純子共訳
：「音楽行動の心理学」音楽之友社 1985
- ・野村浩治、中山裕一郎著：「音楽教育を読む」音楽之友社 1995
- ・井上恵美：「児童の音楽的能力についての研究」
兵庫教育大学 卒業論文 1990
- ・津守由加：「音楽能力の性差についての研究」
兵庫教育大学 卒業論文 1991
- ・橋本里美：「音楽学習の妨げとなる要因の研究」
兵庫教育大学 修士論文 1996

おわりに

ギターの楽譜が、ピアノの楽譜のように音符を並べて表されていないのを知ったのは、中学生の時でした。実際にコードネームについてかじったのは、この大学に入学してからでした。しかも芸術系(音楽)だったから習う機会があったのだと思う。コードに対して、何の興味もわかなかつたし、「便利だ。」という人の気持ちが理解できなかつた。「楽器を演奏できたらいいな。」と思うことがあつたが実際に挑戦するには至らなかつた。何かを始めるには、多くの勇気とパワーが必要である。

現在、音楽活動をしている人は、一体どういう人物なのか。どこで、差が生まれるのか不思議に思ったのが、この論文を書くきっかけになつた。

身近な疑問からスタートしたはずなのに、因子分析、t検定といった数字とのにらめっこになつてしまつた。数字は、一つでは持っている意味は少ないけれど、集まれば大きな意味をもっている。数字に取り組むうちに数字から読みとる難しさをひしひしと感じました。今回わかつたことを少しでも今後の教育に役立てたいです。

今回、論文を書くにあたっては、多くの方に多大な迷惑をかけたことをお詫びし、また深く感謝します。アンケートを行うにあたって協力下さつた皆さんに心よりお礼申し上げます。また、多くの助言と励ましを下さつた同ゼミの大熊さん、葉袋さん、内田さん、香西さん、岩田さん、家尾谷さん、伊藤さん、そして友人に感謝します。最後になりましたが、惜しみない寛大な指導を下さいました鈴木寛先生に心より感謝いたします。